旧堀氏庭園の造営に関する一考察

A Consideration on the Construction of Mr. HORI's Gardens in Tsuwano

仲 隆裕

NAKA Takahiro

京都造形芸術大学

Kyoto University of Art and Design

Key Words : 1. 旧堀氏庭園 2. 津和野 3. 近代の庭園

はじめに

津和野町教育委員会では、島根県鹿足郡津和野町大字邑輝字緑山下に所在する旧堀氏庭園の文化財指定に向けての調査に取り組み、平成16年度に庭園に関する調査を筆者に依頼された。調査成果の全容は、堀氏の沿革、堀氏の建築、堀氏関連遺跡などとともに『旧堀氏庭園調査報告書』（津和野町教育委員会、平成17年3月）に取りまとめられている。本稿は、その成果の概要を述べるものである。

なお、旧堀氏庭園は平成17年5月に名勝の指定を受けた。

1. 旧堀氏庭園の配置

島根県津和野市畑迫の旧堀本家には、大別して3つの庭園が所在する。図1は堀本家の敷地略図である。現在の県道津和野田万川線の北側、白石川を隔てて裏山を背負い堀家の屋敷地がある。

屋敷地は東西に展開し、西側に主屋（天明6年：1786建立）とその庭園が位置し、東側に客殿（楽山荘：明治33年：1900建立）とその庭園が位置する。県道の南側には墓地が位置していたとされるが大正4年頃これを移転し、和楽園が築造されている。

この3つの庭園について、現況をたどりつつ諸資料をもとに造営の経緯と庭園の特徴について述べることとする。

2. 主庭

県道から橋を北にわたり、正門を潜ると東西棟の主屋が南面して建つ。この主屋の主座敷に面して設けられているのが主庭である。なお、この主屋は享保18年（1733）の堀家火災後、津和野亀井侯から贈られた材で新築されたものと伝える。

主座敷は畳敷の広さで、西側に畳の次の間が接続する。主座敷は北側に床と付書院を配しており、南正面に主庭が展開するかたちとなる。主庭は東・南・西の三方を瓦葺きの漆喰仕上げの土塀で囲われた東西12m、南北6mのほぼ長方形である。このような囲われた庭は、地方によっては「坪」「坪の内」「前栽」と呼ばれることがある。

主庭は簡素な平庭で、現在、ツツジ類等の植栽が繁茂してしまっている。そのため詳細な観察や実測図の作成は困難であるが、概略を述べると南西隅に三尊石風の石組があり、その左右にも丈の低い石組がなされている。主座敷正面には、背後の土塀を隠すかのように高さ約2mのイヌマキの生垣が仕立てられ、その足元に南西隅から続く低い石組があり、置灯籠が1基据えられ、灯障りの役木として梅の古木が配されている。

なお、撮影年未詳の古写真（明治33年に完成した楽山荘が写っているので、この年以降のことであろう）によれば、イヌマキの生垣の背後（南）の土塀には幅一間少々小さな部屋が設けられていたようである。

主座敷への動線は、玄関から至る屋内のアプローチもみられるが、庭門からこの主庭を経る形もとられていたと考えられる。それは東側の塀中に庭門が構えられ、主庭の中央を横断する形で飛石が据えられているからである。沓脱石は主座敷と次の間それぞれに据えられ、飛石道と接続する。なお、次の間縁先には、手水鉢が配されている。

このような構成は、藩政時代において構えられた藩主のお成りを迎える庭に類似している。「畑迫堀家略史」によると、宝永年間の皇居造営に際し紫宸殿ほかの普請

写真1 主庭の現況 一の間縁先から庭門を見る

を命ぜられた亀井家が堀家に借入金を申し込んだという。堀家十代藤十郎（伴徳）は格別に津和野藩主亀井家から厚遇されていたといい、当時の藩侯大隅守茲尚は郊外の乗馬に託してしばしば堀家を訪問していたという。また、通常藩主御成を迎える庭には輿をおろす役石があるが、この庭には見られない。このことから推定すれば、藩主

写真2 主庭の古写真（明治33年以降）

は正式の御成ではなく休憩に立ち寄るかたちの訪問であったのであろう。現在の主屋が造営された八代又兵衛の代以降、堀家は大森代官による銅山検分・廻村の際に宿を提供していた。本庭はそのための格式を整えるために作庭されたのではないかと想像される。

2. 客殿（楽山荘）の庭園

(1) 造営の経緯

現在の客殿は黒瓦葺き入母屋造・2階建てで、明治30年に上棟、同33年に竣工したと伝える。「楽山荘」の名は、これを造営した十五代堀藤十郎（礼造）の号「楽山」に拠るのであろう。

客殿の新築に伴って敷地には南側の山より架線を張って土を運び込んでの整地が行われ、既存の建物は白石川の南に移築されたという。家伝によると、現在客殿と庭園が位置する敷地東方には隠居用のはなれと庭園があったとされる。上の蔵（資料室）には「盤楽亭」と記された扁額が保存されており、これが楽山荘以前の隠居屋敷の名称であった可能性がある。

楽山荘以前の施設については、敷地北東端に建つ屋敷神（天神社）の献灯があり、竿部には天保5年3月（1834）の銘がある。この石灯籠と天神社とが同一時期のものかどうかは断定できないが、天保3年に没した伴良の3回忌にあたり十四代堀藤十郎（伴成）が天神社を建立した可能性

が考えられる。大正4年に建立された十三代堀藤十郎（伴良）の碑文には伴良は菅姓である、と記されていることから、菅原道真を祀ったのであろう。伴成は明治8年に家督を礼造に譲り山口に退隠し明治41年に没したということから、隠居屋敷はそれ以前の造営であったとも考えられるが、詳細は不明である。いずれにしろ「盤楽亭」・「楽山荘」いずれも銅山開発に携わった堀家にふさわしい名称といえよう。

なお、敷地南辺の石垣をみると、正門の西側と東側とでは使用される石材は共に裏山にも分布する輝緑岩であるが、西側が野面積みであるのに対し、東側は切込ハギとなっている。東側の石垣がやや南側に張り出していることから考えて、敷地東側が整地された際に既存の石垣を残したまま前面に覆う形で現在の石垣が設けられたものと想像される。

(2) 庭の構成

1) 地割り

庭園は、先述のとおり客殿造営に伴って敷地造成がなされていることから、明治30年頃の作庭と考えて良いだろう。

西面する座敷からの座観とともに、園路をめぐりつつ鑑賞する庭園である。

北側には岩山の斜面が迫る。堀家の裏山は鹿足層群と呼ばれる、泥質岩・砂質岩・礫質岩・チャート・石灰岩などを含む付加型堆積岩からなっている。この岩山の一部を削って滝や平場をつくり園路で結び、切り出された岩で斜面を安定させる石積みをおこなうとともに、所々に石組を配して修景している。

滝の水源は、この裏山を越えた北方に廃鉱となった抗道からの湧水で、数500mにわたって鉄管で引かれている。滝は高さ約10mあり、離れ落ちの2段の構成である。滝水は客殿前面に広がる池にためられ、東南部から配水される。池の護岸は全て石組で、ほぼ裏山に産出する岩石で構成される。池の中央部左右からは岬が延び、土橋が渡される。池には鯉が放たれ、北側の池中には魚溜まりが設けられている。

2) アプローチ

正門から右手（東）、客殿へのアプローチ園路には輝緑岩の板石が敷かれている。中の蔵の東端に接続する漆喰仕

上げの土堀に瓦葺き屋根の門があげられ、内側には門冠の松（アカマツ）が配されている。門を潜ると、花崗岩で縁取りされたあられくずしの延段となる。安山岩の踏分け石からそのまま飛石伝いに直進すると庭門を経て客殿の庭に入る。左手に折れれば、客殿の玄関である。玄関前には、井戸をはさんで西側に自然のポットホールを持つ砂岩の奇岩が、東側には石灰岩の二次生成物である石筍が据えられている。これらはいわゆる陰陽石であろう。

3) 座敷からの主景および縁先の構成

座敷は西面し南北2室が並ぶ。南側が主室で、床を背にして正面を望めば、一幅の絵のような庭園の景が展開する（写真3）。左手から岩山の山裾が延び、中央に池が広がる。前述のように池には2つの岬がのび、みかけ上北池と南池に分けられ座敷からは南池のみを眺めることになる。

南池の中央には中島があるが、実際は中島ではなく南岬である。左手の北岬から斜めに架かる土橋は、庭に奥行き観を与えている。ほぼ正面に四脚の雪見型石灯笼が、左手奥の斜面には十三重石塔が聳える。主要な庭園植栽として

写真3 客殿座敷からみた楽山荘庭園

は針葉樹にアカマツ、イヌマキ、ヒメアスナロが、常緑広葉樹にはモッコク、モチノキ、落葉樹にはタカオカエデ（イロハモミジ）、低木類にはサツキツツジ、タマツゲ、アセビ、アオキ、マンリョウがある。

2つの座敷の縁先にはそれぞれ自然石の沓脱石が据えられ、庭園内を巡る飛石園路につながる。池の西岸近くの踏分石は、庭景に安定感を与えるような大きな安山岩であるが、現在サツキが高く伸びて座敷からは半ば隠されてしまっている。

北側の座敷の縁先には橐型の縁先手水鉢が据えられている。その水門（海）には拳大の赤色チャートが敷き詰められ、涸流れとなって池に向かって伸び、池との境には石橋が渡されている。

4) 池と滝

南池は、水深約40cmで動きのない静かな水面であり、ゆったりと鯉が泳ぐ。護岸はすべて石組であるが、部分的に乱杭がみられる。池底は近年修理されたようで、モルタル状の底打がなされている。

座敷からの鑑賞のみではなく、西岸には踏分石から飛石を介して3段の石段が設けられ、うち2段は水中に没している。なお、このような石段は南岬の付根部にもみられる。池中には数石の石が据えられ、岩島とされる。西南の岩島は高さ約1mの1石と添え石からなる。

滝は、裏山斜面の岩盤を穿って作られている。水源は、この裏山を越えた北方に廃鉱となった抗道からの湧水で、数500mにわたって鉄管で引かれている。滝は2段の構成で、まず約4mの落差で上段の滝が落とされる。数メートルの緩やかな流れを経て、再び約3mの落差で下段の滝が落ち、滝壺には水受石が据えられている。上段の滝の手前には石橋が架けられ、下段の滝には北岬から滝壺まで沢飛石が打たれ落水を間近に見ることができる。

5) 園路

庭門から時計回りで園路を辿ってみると、まず庭門をはいると延段があり、飛石で客殿の南縁先の沓脱石に連なる。客殿の正面を歩み、石橋で涸流れを渡ると北岬である。ここで園路は左右に分かれ、左手に進むと客殿の裏手にまえわる。なお客殿の敷地は裏山の麓を削平して平場を拓げたと見られ、斜面を安定させるための石積みがなされている。右手をやや進むと踏分け石があり、右手土橋をわたると南

写真4 滝石組み（上：上段、下：下段）

写真5 十三重石塔と客殿

岬に、左手は裏山斜面を登る石段となる。

石段を約5m上がると左手（西側）は墓地の区画で、園路は石段を上り詰めた家型墓の手前を右（東）に折れ、上段の滝前を石橋でわたる。その先で園路はさらに2つに分かれ、そのまま斜面を降りると十三重の石塔の脇を通って南岬に、一方斜面をさらにのぼると小広場に出る。ここにはかつて何らかの建物があったのであろう。この東奥には前述した天神社があり、石段をおりと南岬に出る。ここにも踏分石があり、一方は敷地東端の裏門に至り、もう一方は六角型石灯籠の脇を通り南池南岸をまわる。

飛石に使われている石材の多くは酸性凝灰岩、踏分石の多くは青野火山岩と呼ばれる安山岩であり、いずれも津和野市街地東方より搬入されたものと見られる。

1. 和楽園

和楽園は白石川南側に位置する。北面する山の裾部に中島を持つ池庭が作られ、斜面に数段の平場が造成されて記念碑や眺望を得るあずまやが建ち、これらをつづれおりの通路がつなぐ。

和楽園の造営に関する資料は現在のところ見い出されて

いない。ただ、斜面を昇る園路入口にある園名を刻んだ自然石の標石が大正4年（1915）に立てられたものであることから、この年の竣工とされている。なお、現在の和楽園入り口から前の蔵にいたる間の山麓部に設けられた滝石組は昭和の造営と伝える。

前述したように、この山中には墓地がありそれが和楽園造営に伴い移転されたという。山中の平場や通路が前身墓地のものをどの程度踏襲しているかは不明である。

通路はゆるやかで幅広い舗装路と、急勾配の細い石段とに大別され、前者は玉石の石積みを伴っていることに對し、後者は石組を伴っている。また、前者を昇ると明治43年に建立された十四代伴成の銅像（現在は台石のみ）の建つ平場を経て、大正4年に建立された十三代伴良の記念碑の建つ平場に至る。後者は、池の水源となる滝石組の前面を経て、岩場を昇り、六角堂とよばれるあずまやに至る。

これらのことから、前者は祖先の業績を祀るためのいわば参拝路であり、後者が風致を楽しむ園路であると考えられる。後者の園路はあたかも杭道をあゆむかのように岩盤を巡っていることから、この庭園のモチーフが鉾山にあったとみることができるのではないだろうか。

一方、この庭園を鑑賞する視点場は、客殿二階の座敷にもあったと考えられる。この座敷から和楽園はあたかも座敷縁先に展開しているかのように感じられるのである（写真）。礼造は、伴良・伴成の胸像や記念碑を仰いで銅山開発や地域の発展に尽くした祖先の業績を讃え、感謝し、冥福を日々祈っていたものと想像される。

写真6 客殿2階からみた和楽園